

江戸時代の動物観 — 『誹風柳多留』を中心に—

How Japanese View Animals in the Edo Period:  
With a Focus on “Haihuyanagitaru”

学籍番号：201421613

氏名：横田 茜

Akane YOKOTA

江戸時代は人と動物との関係に変化のあった時代である。江戸時代は、自然優位の古代中世と、人間の力が自然に勝る近現代の過渡期、人間の力が自然の力に対抗できるまでに増大した時代であり、同時に、西洋からもたらされた博物学によって、それまで日本にはなかった、科学的な動物観が普及した時代でもある。

本稿では、江戸の庶民の感覚がよく表れていると考えられる『誹風柳多留』から、このような時代の流れの中で江戸の庶民が動物とどのように関わっていたのか考察することを目的とする。

研究方法は文献調査を中心とした。まず、江戸時代の動物観について扱う先行研究を分析したところ、動物観に関する研究はあるものの、川柳に表れる動物について網羅的に扱ったものや、年代による変化を扱ったものはなかった。よって、『誹風柳多留』から動物が詠み込まれている句を抜き出し、詠まれている動物の傾向について考察した。

調査の結果、時代が下るにつれて詠まれる動物の種類がやや増えること、多く詠まれるのは家畜やペット、または生活圏を共にする身近な動物、また季節を感じさせる動物であることが分かった。これらのことは、江戸の庶民文化の中で、動物への注目が増したこと、また季節を感じさせる動物を強く意識して生活していたことを示しているのではないだろうか。

研究指導教員：綿坂 豊昭

副研究指導教員：白井 哲哉